異文化理解に向けた非言語的手法によるイメージ可視化の可能性

日本人と外国人の災害イメージ描画調査を事例として

Potential of Drawing-Based Nonverbal Methods for Visualizing Mental Imagery in Intercultural Understanding・
A Comparative Study of Disaster Imagery among Japanese and Foreign Residents

チョウ　ペイリン[1)]　丸山　幸伸[2)]
CHANG Peilin [1)]　MARUYAMA Yukinobu[2)]
1) 武蔵野美術大学　造形構想研究科　クリエイティブリーダーシップコース　2) 武蔵野美術大学

Abstract : This study examines the potential of drawing-based nonverbal methods for intercultural understanding. Using disaster imagery as a case, it compares drawings and narratives produced by Japanese and foreign residents in Japan. The findings suggest that drawings can visualize culturally shaped disaster imagery and reveal structural differences in how imagined disaster situations are connected to emotion, judgment, and action.

Key Word : nonverbal methods, disaster imagery, intercultural understanding

1. 研究背景と目的

グローバル化により、異なる文化的背景をもつ人々が共に暮らす場面が増える中で、異文化における認識や価値観の差異が、日常生活や社会的支援の場面で課題を生じさせている。異文化間の差異は翻訳だけでは捉えきれず、従来の言語中心の調査では、未経験状況に対する想像や言語化しにくい感情・判断を十分に把握しにくい。

そこで本研究では、災害イメージを事例として、異文化間における内的イメージの差異を捉える方法を検討する。具体的には、描画と語りを統合的に分析可能な質的データとして扱う手順を示し、日本人と外国人の災害イメージの構造差がどのように表出するかを明らかにする。

2. 先行研究

2.1 非言語的手法の可能性

Harper（2002）は、言語に依存しない視覚的手法が研究者と参加者の文化的ギャップを埋める媒介となりうると論じている。視覚研究には、①図像そのものを分析対象とする立場と、②図像を語りの媒介として用いる立場がある。①は、構図解釈や記号学など、画像そのものの視覚的特徴を分析する方法を示している（Rose, 2016）。HTP（屋・樹・人）やLMT（風景構成法）などの投映法も、この系譜に位置づけられる。②は、Visual Elicitation（Bagnoli, 2009）やZMET（Zaltman, 2003）、画像を手がかりに深層イメージや潜在的な意味構造を引き出す手法として知られている。ただし写真ベースの手法は既存の出来事の語りには有効でも、未経験の未来場面の想像には限界がある。

これに対し、Drawing-based Interview は、参加者自身が絵を描き、その描画を手がかりに語る手法であり、想像上の状況や未経験の場面も表現できる点に特徴がある（Brailas, 2020）。一方で、既存研究では図像が補助資料として扱われることが多く、図像を独立した質的データとしてどう分析するかは十分に整理されていない。Trombeta（2022）のTVTA は図像とテキストを並行して扱う枠組みを提示しているが、異文化比較における描画の統合分析にはなお検討の余地がある。

2.2 災害イメージの重要性

災害イメージは防災行動の前提であり、具体的にイメージできなければ適切な備えは難しい（近藤ほか , 2005）。それは情報があってもイメージが働かなければ行動につながりにくいことも指摘されている（Ommer, 2024）。現在、日本の外国人向け防災は多言語翻訳など情報整備が中心であり、「情報は届いても行動につながらない」という課題が残る。この乖離を理解するには、イメージの形成から行動を促すまでの構造を可視化する必要がある。しかし既存研究は会話や自由記述など言語ベースの方法が中心であり、外国人の深層的認識や感情を捉えにくい。

以上より、異文化理解において言語だけでは捉えにくい内的イメージを可視化する方法はなお十分ではなく、とくに描画された図像を語りと統合して分析する方法は十分に確立されていない。災害イメージは、経験や文化的背景の影響を受けて形成されるため、異文化間の差異を可視化し、非言語的手法の有効性を検証する題材として適している。そこで本研究では、日本人と外国人の災害イメージの差異に着目し、描画調査と半構造化インタビューを組み合わせ、図像と語りを統合的に分析する手順の構築を目指す。

3. 調査と分析方法

本研究は外国人を日本人の防災行動モデルからの逸脱としてではなく、異なる文化的背景にもとづく固有の災害イメージと判断構造をもつ主体として位置づけ、描画を使って同一条件下で比較した点にある。また、多言語による記述や発話は可能な限り原文のまま保持し、描画と統合して分析した。

① 調査対象：日本人 13 名、外国人 18 名の計 31 名を対象に描画調査を実施した。外国人参加者の国籍は台湾、中国、ロシア、韓国、チリ、フィンランドなどであり、在日年数は 0 年から 17 年まで幅がある。

② 調査設計：本研究では、Drawing-based Interview（Brailas, 2020）を参考に、先に描画でイメージを可視化し、その後の語りによって補完する方法を採用した。描画テーマは「台風・震度 4・震度 7 の地震・津波」の四つとし、各参加者には「発生直後・1 時間後・1 日後」の三段階について自由に描いてもらった。加えて、各場面に短文記述を付し、その後に口頭説明または半構造化インタビューを行った。

③ 分析方法：描画は単独で解釈せず、短文記述・口頭説明・

© Copyright - JSSD73rd

インタビュー記録と統合してナラティブ化したうえで、意味単位ごとにカード化し、KJ 法によって構造化した。さらに各カードに属性情報を付与し、抽出された質的構造に属性分布を重ねることで、日本人／外国人間の共通性と差異を比較した。

4. 調査結果

4.1 災害イメージの差異

本研究の分析により、日本人と外国人の差異は、知識量の多寡ではなく、災害をどのように自分事として意味づけ、判断や行動へ接続するかという認知構造の差として捉えられた。日本人では、教育や経験を通じて形成された災害イメージが比較的具体的であり、恐怖や不安が避難や備えといった対処行動へ結びつきやすかった。描画でも、初期対応や避難手順など、行動の流れが表現されやすかった。

これに対して外国人では、日本が災害の多い国であるという知識があっても、それが生活空間や身体感覚と結びついた具体的イメージになりにくく、「何が起こるのか」「何をすればよいのか」が曖昧なまま残りやすかった。そのため、恐怖が生じても行動イメージへ接続しにくく、周囲の日本人の反応や行政支援を判断の手がかりとする傾向がみられた。描画では、対処行動よりも、災害風景や被害場面、孤立感や不安、他者とのつながりを求める場面が目立った。

さらに、属性比較の結果、在日年数が長くなるほど災害イメージの解像度は高まり、発生事象の理解や対処行動も増える傾向がみられたが、他者や日本社会への依存に関する語りは一定程度持続していた。また、津波など高威力の災害では、国籍を問わず心理的距離が近づき、将来不安が顕在化しやすかった。

4.2 方法としての考察

1. 描画法の実施可能性と課題：描画には一定の難しさがあり、とくに外国人からは、前後の状況まで含めると「何をどこまで描くか」が判断しにくいという声があった。津波場面は日本人・外国人ともに描きにくかった。一方で、巧拙の差が分析を大きく左右することはなく、多くの参加者は配置、矢印、ラベル等によって状況を表現できた。したがって、描画法は専門的技能を前提としない調査手法として成立しうる。
2. 想像の具体化と深層イメージの抽出：描画は、災害を「自分がどこにいて、誰といて、どう巻き込まれるか」という具体的状況として立ち上げ、語りを促進する導入として機能した。また、外国人や災害未経験者にとっては、「描けない」「想像できない」という反応自体が、イメージの曖昧さや準備不足を示すデータとなった。したがって、描画は言語化以前のイメージを把握する手がかりとして有効であった。
3. 図像とテキストを統合する分析枠組み：本研究は、TVTA（Trombeta, 2022）を参照しつつ、図像とテキストを補助関係ではなく、同一レベルの分析単位として扱った点に特徴がある。描画、短文記述、インタビュー記録を等重のデータとして整理し、ナラティブによって時間軸と文脈を保持したうえで、KJ 法によりボトムアップに構造化した。さらに、国籍や在日年数などの属性情報を重ねることで、共通の構造の中で差異がどこに現れるのかを比較した。この「KJ 法＋属性比較」の枠組みにより、研究者の先行的な想定に回収されにくい形で、異文化間の共通性と差異、行動構造上のギャップを抽出することが可能となった。

5．結論と展望

本研究は、異質なデータを共通構造へ統合し、属性分布を重ねて比較することで、災害イメージの差異を可視・可比較な認知構造として捉えられることを示した。とくに、差異を単なる「日本人／外国人」の二分法に還元せず、在日年数や経験の有無など複数の条件と重ねて位置づけられる点に、本手法の方法論的意義がある。描画を核とする非言語的手法は、言語だけでは捉えにくい差異を対話可能な形へ変換し、異文化理解の共通基盤となりうる。

一方で、サンプル数および構成には偏りがあり、結果の一般化には慎重さが必要である。また、手順の標準化と実施体制の整備も今後の課題として残されている。さらに、描画は量的調査の代替ではなく、「Why/How」を補完的に捉える方法として位置づける必要がある。

以上を踏まえると、今後は国籍や属性の幅を広げて検証を進めるとともに、少人数の描画調査で仮説や構造差を抽出し、その後にアンケートで検証する質量混合の研究デザインへ発展させることが有効である。さらに、描画・共有・対話を組み合わせることで、防災教育への実装可能性も高められる。また本手法は災害に限らず、気候変動、感染症、環境問題など、抽象度が高く行動と結びつくテーマにも応用可能である。非言語的手法にもとづくイメージ可視化を、異文化理解のための研究・実践枠組みとして展開していくことが今後の課題である。

6．参考文献

- Brailas, A. (2020). Using drawings in qualitative interviews: An introduction to the practice. The Qualitative Report, 25(12), 4447–4460.
- Harper, D. (2002). Talking about pictures: A case for photo elicitation. Visual Studies, 17(1), 13–26.
- Trombeta, G., & Cox, S. M. (2022). The textual-visual thematic analysis: A framework to analyze the conjunction and interaction of visual and textual data. The Qualitative Report, 27(6), 1557–1574.
- 川喜田二郎 (1967).『発想法―創造性開発のために 改版』中央公論社 .

© Copyright - JSSD73rd